

犬養毅、頭山満が丁寧に埋葬した李朝末期の金玉均墓城南斜面に小さな墓標があり、朴裕宏と刻まれている。はて誰かな、私の好奇心が刺激を受けた。

ある年、定宿さぬき倶楽部から麻布十番の薔薇屋にくつろいだ私ども二人。会話は青山墓地について始まった。

「よくあの墓地を訪ねているよ」

「それならばご存知でしょう、朴何とやらと刻まれた小さな石柱があるのを」

「お、もちろん知っている。明治時代だがね、朝鮮から一人の青年が日本の陸軍士官学校に留学したが、卒業に至る前に自殺した」

「陸士で明治時代に朝鮮から留学生を迎えたことを大伯父石光真清が手記に書いています。定員五十人だったのに推薦入学した朝鮮人を加えて五十一人になったと」

「そうか、詳しく話してくれないか。手掛かりになる」

真清が残した資料からいとこがまとめた四冊の文庫本には彼が幼年学校を無事終えて陸士に転じて半年、朝鮮人学生を励ます目的もあつたのか、朝鮮服をまとった高官が参観に来たと書いてある。

「青い目をしたドイツ人モルレンドルフ税務長官。閔妃が雇った外国人。全校生徒の前で訓示を垂れたようですよ」

「明治二十年（一八八九）三月だったそうです。この参観日が過ぎてから朴の様子がおかしくなり始めた。」

「たかがドイツ人に過ぎない男に激励される自分とは、いったい何なんだ。相当な屈辱を味わったと真清は想像しています。四月に入り、満開の桜が散り始めた頃自室寝台の上で小銃を咽喉部に当て足指を操作して。遺書はあったようですが、教官が持ち去ってしまい、同期生には発表されなかったそうです。」

暫く無言で考えこんでいた崔さんは口を開いた。

「列強の谷間に呻吟した朝鮮が、朴青年自殺事件の背景にあることを考えなくては」

「ドイツ人云々は口実でしょう。それよりも母国の窮境を憂い、死を選んだのだと思う。簡単に言えば、清国派の事大党と親日的民族派の独立党がクーデターを繰り返した。挙句閔妃が差し向けた人間に殺された。朴が最も尊敬していた金玉均の死を悼み亡くなったと想う」

だからこそ小さな墓標が金玉均の墓域に立てられたのだろう。好奇心が招いた一連の会話は当然のように橋本家説明に向かった。

「石光はそれからどうなったの」

「金玉均が殺された年に歩兵中尉に任官しています。八月、日本は日本朝鮮暫定合同条款を結んで、日清戦争の先にある朝鮮併合に突き進んだ。三月二十日輸送船相模丸に乗船、宇品港を出た直後兄真澄の急逝を知らされている。所属は近衛。第五師団が鴨緑江を渡河して満州へ。第三師団は海城から營口へ、第一、第六師団が旅順に上陸した。威海衛を落としたのは第二師団です」

兄真澄というのが財界で鳴らした馬越恭平に重用され大日本麦酒の専務だったと説明した。岡山の高梨川沿いに秦村があり、農業をしていた橋本卯太郎が洪水で被害にあったのを契機に一人上京、新聞配達をして勉強。地域にあった馬越家の主に見込まれ、やがてビール会社にやとわれる。専務の目に留まり、石光家末娘真都と結婚した。

「真清のクラスをみた先任学生が橘周太、日露戦争で英雄となったタチバナ中佐です。同期や弟が大將、元帥に登用されたのを横目に、これからの日本が安全を得るにはロシアの動向だと判断します。願い出て諜報活動に身を呈します。朴とは誰ですか」

「欧米の近代化に習って新しい技術や制度を導入して朝鮮の内政改革をはかろうとした開化思想。朴珪寿の門人だった金玉均、朴泳孝。開化派と言われた朴の息子だよ。内政改革の徹底を目指す急進開化派の一人で踏ん張った人だ。金玉均が身元保証人となって日本陸軍幼年学校に入ったのだよ」

歴史学者アーノルド・トインビーが歴史の研究という著書で十九世紀のアジアには二つの選択肢しかない。西欧を受け入れ西欧に全面降伏して生き延びるか、西欧に抵抗して滅びるかのどちらかだと言ったが日本を訪問していない。彼がこうした過ちを犯したのは蔑視だったのでしょうかと話を進めたものだ。

「それでアキラの親は？ 六男二女を生んだ祖母たちは男に宇宙乾坤龍虎の一字を与えていったとか」

「はい、三男乾三です。検察官になりました」

「馬越という経営者の名は記憶にある。恩に報いることを知った人だねえ」

「馬越は、人は勉強によって術を得ることはできる。が、誠意を得ることは出来ない。生まれながらに備わった誠意は数万貫の鉱石の中から掘り当てた宝石のように尊い。こう言っていたそうです」

崔さんは清酒を好みビールを飲まない。ウイスキーなら目がない。ついでに日本のビールを述べると、北海道の札幌麦酒会社が第一号。二番手に明治維新の功労者桂太郎の弟・二郎が資本金十五万円で恵比寿麦酒会社を創建した。明治二十一年行き詰まり、正直一徹働いた真澄の努力が後継者馬越の経営方針とピツタリ一致し、二十五年下期には配当七分二厘を実現した。馬越は真澄死後毎年正月に真清の母・守家を訪ね、実に四十数年礼讓を続けてきた。

ついに橋本家の解剖にまで崔さんは話を掘り出してしまふ。のちに首相となる龍太郎母春子。父親が大野といい、朝鮮総督府政務総監を務めた元警視総監緑一郎は勲一等旭日大綬章、貴族院議員に輝いた。

「そう、大野はね、朝鮮在任中、伊藤博文をハルピン駅頭で殺した安重根に会いたくて旅順監獄まで行つたが、管轄が違ふ、と一蹴され面会が出来なかつた」

昭和十一年八月のことだつた。

橋本家には別人の大野豊四がいる。正三位勲二等功三級陸軍中将。二男戦艦大和やまとの電探開発に携わつた海軍大佐宙二嫁になつたのが長女香だ。

「アキラは天皇明仁の同級生になつた。相当苦勞も重ねただらうね」

このような会話をして深夜二人は別れた。これも崔さんを語る一面かと思ひ、六十年記念号に納めて頂く。